福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1477集

西新町遺跡12

―第23次調査報告―

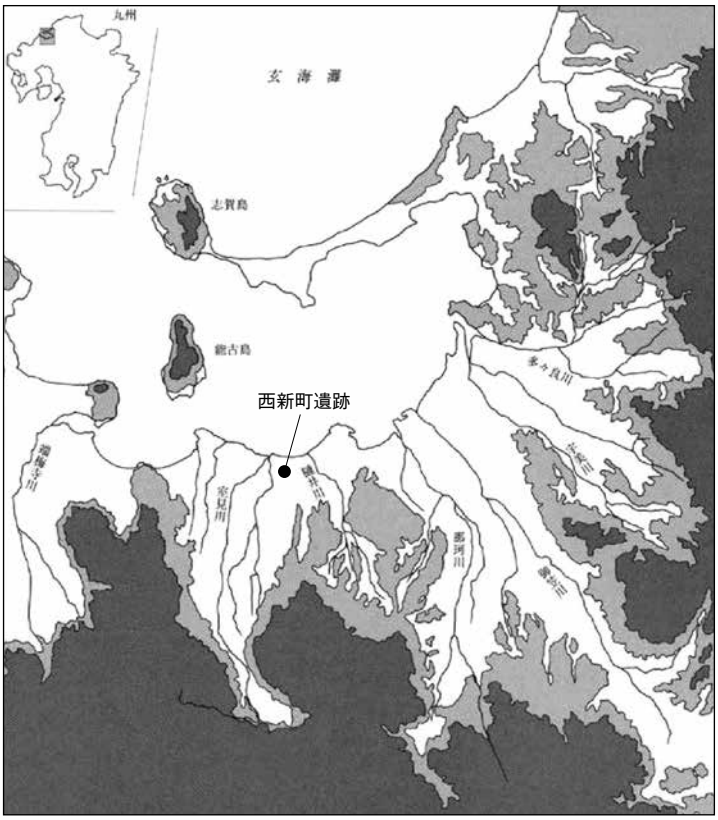
２０２３

福 岡 市 教 育 委 員 会

西新町遺跡12

—第23次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1477集



遺跡略号 NSJ － 23

調査番号 2036

２０２３

福 岡 市 教 育 委 員 会

西新町遺跡23次調査区全景（南より）

西新町遺跡23次調査区（東より）

23次調査区周辺（南より）

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも早良平野には、先史時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の都市化により失われる文化財を保護し、後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、博多湾に面する砂丘遺跡、西新町遺跡第23次調査について報告するものです。この調査では３世紀頃の弥生時代終末から古墳時代前期にかけての生活の痕跡を検出するとともに、外来系の土器や石製の漁撈具が出土しました。これらは地域の歴史の解明するうえで重要な資料となるものです。本書が文化財保護にたいする理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。

令和５年３月23日

福岡市教育委員会

教育長　石橋　　正信

例　言

1．本書は福岡市が、令和２年度に早良区西新三丁目で実施した西新町遺跡第23次調査の報告書である。

2．発掘調査および整理報告書作成は、令達事業として実施した。

3．実測図作成および写真撮影の実施は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、坂口 剛毅
遺構写真撮影	常松
遺物実測図作成	山崎 賀代子
遺物写真撮影	常松
製図	常松、山崎 賀代子

4．本文に掲載した公共座標は世界測地系である。

5．本文中に掲載した方位は、座標北を示す。

6．本書に使用した国土地理院データは福岡市WEBGISの情報をもとに作成したものである。

7．本文中に使用する遺構略号とその性格は、以下のとおりである。

SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　P：柱穴　SX：その他の遺構

8．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

9．本書の編集・執筆は常松が行った。

遺跡名	西新町遺跡	調査次数	23 次	調査略号	NSJ-23
調査番号	2036	分布地図図幅名	071 西新	遺跡登録番号	0240
調査地	福岡市早良区西新三丁目 204 番 3			調査面積	90㎡
調査期間	令和２（2020）年 12 月 14 日～令和３（2021）年１月　７日				
整理期間	令和４（2022）年　４月　１日～令和５（2023）年３月 31 日				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに…… 1
Ⅱ．立地と環境…… 1
Ⅲ．調査の記録…… 5
Ⅳ．まとめ ……12

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成31年２月28日、福岡市財政局から出された早良区西新三丁目204番３における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号30－1－114）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西新町遺跡の東部に含まれることから令和２(2020)年８月に試掘調査を実施した。

調査によって現地表面下85～105cmで遺構を確認したことから、福岡市財政局（財産活用課）と協議を行った。その結果、今後想定される開発にたいして埋蔵文化財への影響は回避できないとみられることから、遺構分布が確認された対象地の西側を中心に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和２年12月14日から令和３(2021)年１月７日にかけて発掘調査を行い、令和４年度に資料整理および報告書作成を実施した。年末年始の慌ただしいなかの調査であったが、関係者には発掘現場の条件整備について迅速な対応をはかっていただいた。

２．調査の組織

調査委託：福岡市財政局（財産活用課）

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和２年度・資料整理：令和４年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課課長　菅波 正人

同課調査第1係長　吉武 学　（令和２年度）

本田浩二郎　（令和４年度）

同課調査第２係長　藏冨士 寛　（令和２年度）

井上 繭子　（令和４年度）

調査庶務：文化財活用課　松原 加奈枝（令和２年度）

内藤　愛　（令和４年度）

事前審査：埋蔵文化財課　事前審査係長　本田 浩二郎（令和２年度）

田上 勇一郎（令和４年度）

同課事前審査係　文化財主事　神　啓崇　（令和２年度）

比嘉 えりか（令和４年度）

調査・報告担当：同課　主任文化財主事　常松 幹雄

Ⅱ．立地と環境

西新町遺跡は、福岡市の西郊、早良平野北側の博多湾に面した海浜砂丘上に立地する（図１・10）。

大濠公園西郊の鳥飼低地北部には海岸線に平行する3列の砂丘Ａ・Ｂ・Ｃと砂丘間低地が形成された。砂丘は、縄文海進期の海面上昇にともなって形成された砂州に風性砂に黄砂の混じった風積土層が被ってできたものである（図２）。

Ｂ砂丘に位置する第14・18・21次調査ではアカホヤ火山灰を含む砂層から縄文前期の轟Ｂ式と曽畑式土器が検出された。

内陸側のＡ砂丘は鳥飼3丁目付近に分布する長さ400m、幅80m、高さ4.5mの微高地となっている。

中間のＢ砂丘は鳥飼神社付近から西新・藤崎に連続する全長2.5㎞で幅約170ｍに達する規模である。

海側のＣ砂丘は西公園から百道にかけての元寇防塁線に沿って分布する幅50ｍの砂丘である（下山ほか1998）。

西新町遺跡における最初の発見記録は、昭和5（1930）年修猷館の電車通り沿いで見つかった丹塗の甕棺である（鏡山・永倉1930）。この資料は現在、東京国立博物館の所蔵となっている。また同年に発表された飯蛸壷の出土地名表には福岡市西新町（県立中学修猷館構内）と記されている（永倉1930）。

1976年から78年にかけての地下鉄1号線にともなう2次調査は、砂丘を縦断する全長500ｍにわたる調査が行われた。この調査で集落域と墓域の分布範囲、砂丘の東西の落ち際が把握された。1984年の3次調査は修猷館高校図書館の建設に伴う調査で、古墳時代前期の集落跡が海側に広がることが確認された。2023年2月現在、西新町遺跡は23次にわたる調査が行われた。弥生時代から古墳前期の遺構は、脇山口の交差点を中心に東西500ｍ、南北250ｍの範囲で確認されている。

西新式土器の標識とされる壷と甕、旧藤崎刑務所内出土とされてきたこれらふたつの土器（武末1976）は、「弥生式土器聚成図録 正編」には壷の発見地名は筑前国福岡市西新町、甕は筑前国福岡市西新町刑務所前と記されている（小林・森本1938）。これらの土器は旧制福岡高校から、九州大学教養部の旧制福岡高等学校歴史地理資料室「玉泉館」を経て、現在九州大学総合研究博物館で「玉泉館旧蔵考古資料」として保管されている（谷澤・岩永2021）。

表1　西新町遺跡における調査区の一覧

調査次数	墓域の構成	集落跡	備考
修猷館グランド	甕棺墓 1 基	―	鏡山・永倉 1930
1 次調査	甕棺墓数基	―	未報告
2 次調査	甕棺墓 30 基・貝釧 3・銅剣切先	竪穴住居跡 57 棟・瓦質土器・朝鮮半島系甑・剣鋳型	市報 79 集
3 次調査	―	竪穴住居跡 7 棟・瓦質土器・朝鮮半島系甑	県報 72 集
4 次調査	―	竪穴住居跡 7 棟・瓦質土器	市報 203 集
5 次調査	―	竪穴住居跡 9 棟・板状鉄斧	市報 375 集
6 次調査	―	竪穴住居跡 10 棟	市報 483 集
7 次調査	甕棺墓 5 基	竪穴住居跡 2 棟	市報 483 集
8 次調査	―	竪穴住居跡 1 棟（中期）・3 棟（終末）	市報 484 集
9 次調査	―	竪穴住居跡 15 棟（中期）・4 棟（終末）・板状鉄斧	市報 505 集
10 次調査	甕棺墓 32 基・土器蓋土壙墓 6 基	竪穴住居跡 7 棟	市報 683 集
11 次調査	―	古墳前期の土坑、集落の南東部	市年報 12 集
12 次調査	―	竪穴住居跡 158 棟・五銖銭・ガラス玉鋳型・玉原石	県報 154・157 集
13 次調査	―	竪穴住居跡 86 棟・瓦質土器・ガラス玉鋳型	県報 168・178 集
14 次調査	―	竪穴住居跡 29 棟・井戸・瓦質土器・ガラス玉	県報 200 集
15 次調査	―	土坑・朝鮮半島系甑、遺構は希薄	県報 200 集
16 次調査	―	竪穴住居跡 22 棟（中期）・トンボ玉	市報 846 集
17 次調査	―	竪穴住居跡 39 棟・瓦質土器・貨泉	県報 208 集
18 次調査	甕棺墓 1 基	竪穴住居跡 3 棟・縄文土器	市報 939 集
19 次調査	―	竪穴住居跡 8 棟（中期）	市報 984 集
20 次調査	―	竪穴住居跡 45 棟	県報 218 集
21 次調査	―	竪穴住居跡 3 棟・条痕文土器	市報 985 集
22 次調査	―	竪穴住居跡 10 棟・在来系・畿内系・半島系土器	県報 221 集
23 次調査	―	古墳前期の土坑、集落の東部	市報 1477 集

図１　西新町遺跡23次調査地点の位置（1/50,000）　■ 23次調査地点

23次調査区は西新町遺跡の東部、本調査となった事例としては最も東に位置している。

近接する調査区としては脇山口から百道浜への道路拡幅にともなう西側の調査（４次）、建物の建替えにともなう北西部の調査（５次）、修猷館高校図書館の建設に伴う調査（３次）そして地下鉄建設に伴う調査（２次）があげられる（図３・４）。

【参考文献】

鏡山 猛・永倉松男1930「筑前國福岡市発見の甕棺」『考古学』第壹巻　第5・6号 東京考古学会

小林行雄・森本六爾1938「弥生式土器聚成図録 正編」東京考古学会

小林行雄(編)1939「弥生式土器聚成図録 正編解説」東京考古学会

下山正一・磯 望・野井英明・高塚 潔・小林 茂・佐伯弘次1998「鳥飼低地の第四紀層と地形形成」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 45～68頁

武末純一1976「付録：弥生終末期土器参考資料」『古文化談叢』第3集 九州古文化研究会

谷澤亜里・岩永省三2021「玉泉館旧蔵考古資料 ―近年の再整理を経ての資料紹介―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第18号、九州大学総合研究博物館

常松幹雄2016「弥生時代23 西新町遺跡／藤崎遺跡」『新修　福岡市史　資料編考古１』福岡市

永倉松男1930「口部に一孔を有する異形彌生土器」『考古学』第壹巻　第5・6号 東京考古学会

濱石哲也2016「古墳時代１ 西新町遺跡／藤崎遺跡」『新修　福岡市史　資料編考古１』福岡市

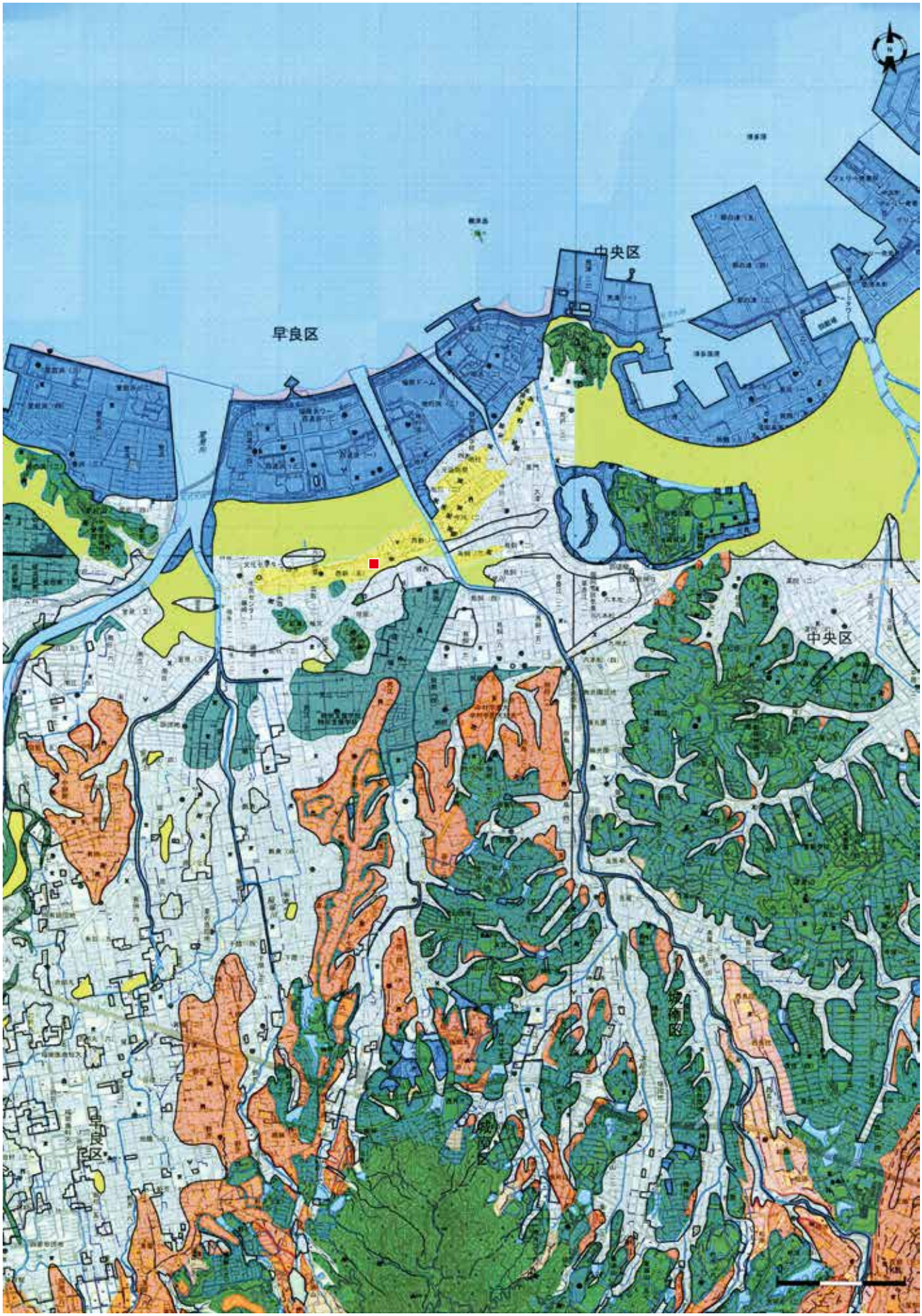


図２　西新町遺跡23次調査区の立地（1/40,000）　■ 23次調査地点

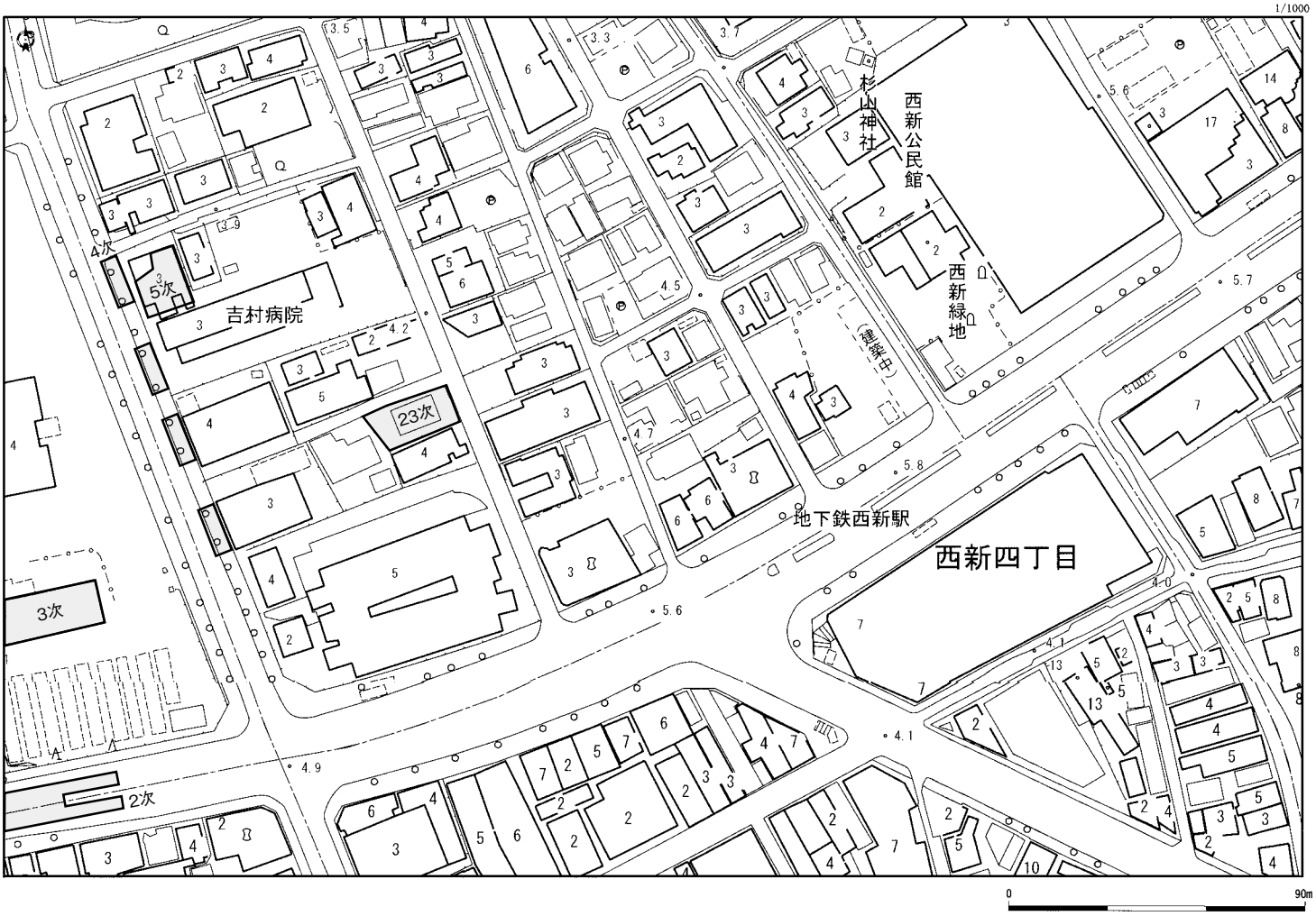


図３　西新町遺跡23次調査区位置図１（1/2,000）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

西新町遺跡は、博多湾岸に形成された砂丘遺跡で、西側の谷を隔てて藤崎遺跡と連なっている。調査地は、砂丘の東部にあたる（図10）。

23次調査は令和２年12月14日からバックフォーによる掘削を行い、遺構の写真撮影・遺構実測を実施したのち、遺構の広がりと砂丘面の傾斜を確認するため東側に向けて拡張した。北壁の土層図および遺構実測を実施後、埋戻しを行い令和３年１月７日に発掘機材の撤収をおこなった。調査面積は90㎡、出土遺物はコンテナ５箱である。

地表面の高さは4.6mから4.8mで敷地の長軸にそって東側に緩やかに傾斜している。地表から0.8m下で黄白色の風成砂の層となり、風成砂を0.3mほど掘り下げた面で４基の土坑が検出された。うち隅丸方形プランの土坑SX01から土器がまとまって出土した。調査地の東側でも土坑SX04が検出されたことから、集落はさらに東側に広がる可能性がある。

土坑からは３世紀代の西新式段階の台付鉢や壺などが出土し、風成砂の遺物包含層では漁労に使用されたとみられる石器なども検出された。また表層では北宋の貨幣や近代のガラス瓶などを採集することができた。

図４　西新町遺跡23次調査区位置図２（1/1,000）

２．検出遺構

地山は黄白色の風成砂の層である。土坑状の遺構SX01～05が検出された（図６・７）。

SX01（図７）

調査区中央で検出された長軸1.6m、短軸1.3mの隅丸方形の土坑である。暗褐色を帯びた埋土で確認された。土坑の壁は、東側の遺存状況がよい箇所で約40cm、西側は25cmほどが残っている。

SX01出土遺物（図８）

出土遺物は在来の器種からなる土器である。

１は甕形土器の口縁から頸部にかけての破片である。口縁部は立ち上がり、胴部は上半に重心がくるタイプとみられる。２は在来系の丸底壺で、内外面に粗い刷毛目調整の痕跡がのこる。褐色で石英の粒子を多く含む。３は台付きの鉢形土器で外反する口縁部をもつ。口径22.5cm、器高22.5cmをはかる。黄灰色を呈し、石英の粒子を多く含む。口縁部から胴部上半および脚部裾に被熱による剥離がみられる。２次調査Ｇ区（79集133図）の台付きの鉢形土器に比べ台部は、筒状に長く伸びている。

SX02（図７）

調査区の西側で検出された径1.4mの円形プランの土坑である。埋土は暗褐色。深さ約40cmをはかる。

SX02出土遺物（図８）

出土遺物は在来の器種からなる土器である。

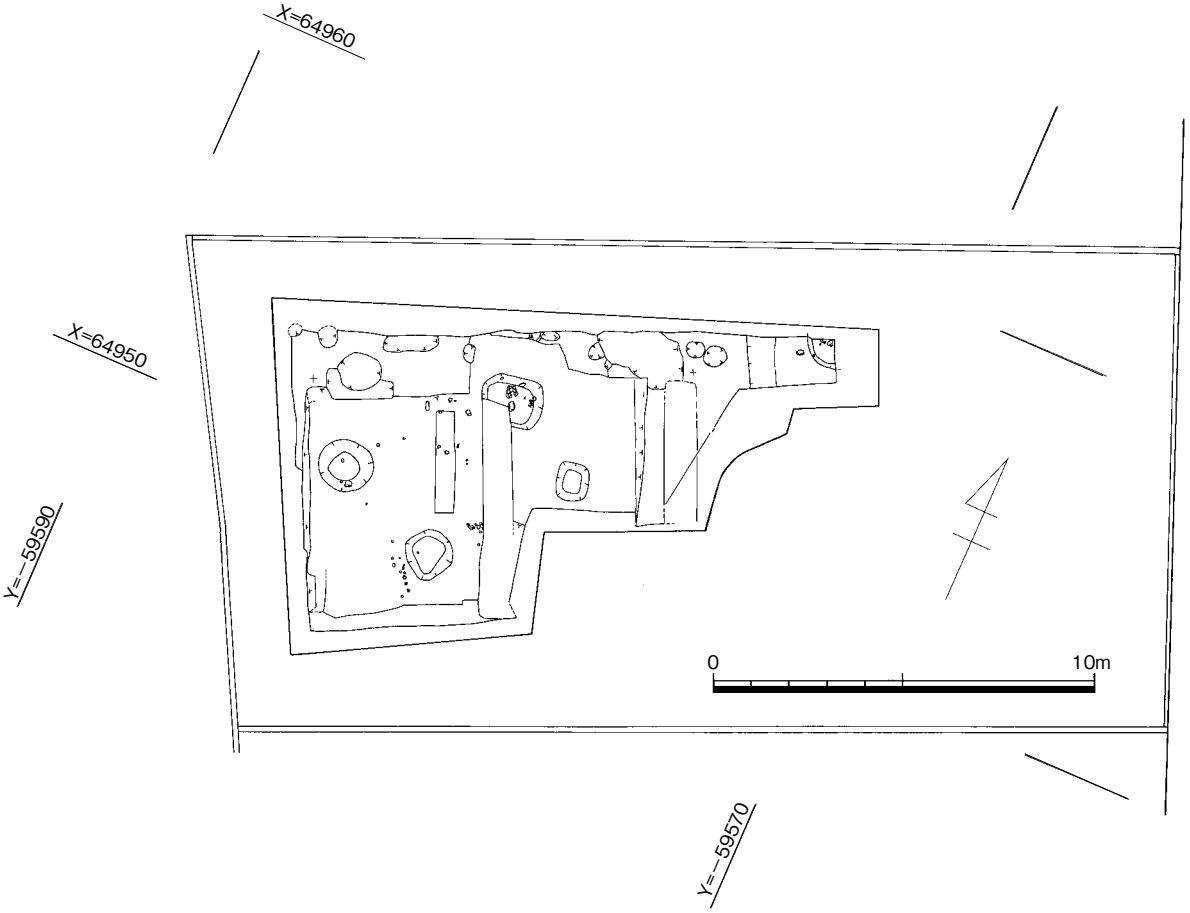


図５　西新町遺跡23次調査区位置図３（1/100）

４は布留式甕の破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。５は鉢形土器で、精製の器種である。褐色を呈し胎土は精良である。

SX03（図７）

調査区の南西側で検出された径1.3mの不整円形プランの土坑である。埋土は暗褐色。深さ約15cmをはかる。

SX03出土遺物（図８）

出土遺物は在来の器種からなる土器である。

６は在来系の鉢形土器で、口縁端部が肥厚し、口縁部からそのまま底部につながるボール状の器種である。口径約30cmをはかる。黄灰色で石英の砂礫を多く含む。

SX04（図７）

調査区の東端で検出された土坑である。埋土は暗褐色。深さ約30cmをはかり、底から15cmほどで精製の壺形土器が検出された。

SX04出土遺物（図８）

７は偏球形の胴部にゆるく外反する口縁部を付した精製の壺形土器。筒形の口縁部外面は縦方向の磨き、胴部上半は右下がりのハケ目の後縦方向の磨き、最大径の付近に横方向の磨きを加えている。底部は縦横の磨き調整がみられる。口縁部内面は横位のハケ目調整を施し、胴部は全面に丁寧なハケ目調整を施した後、底部に放射状の調整を加えている。暗黄灰色で雲母粒を多く含んでいる。

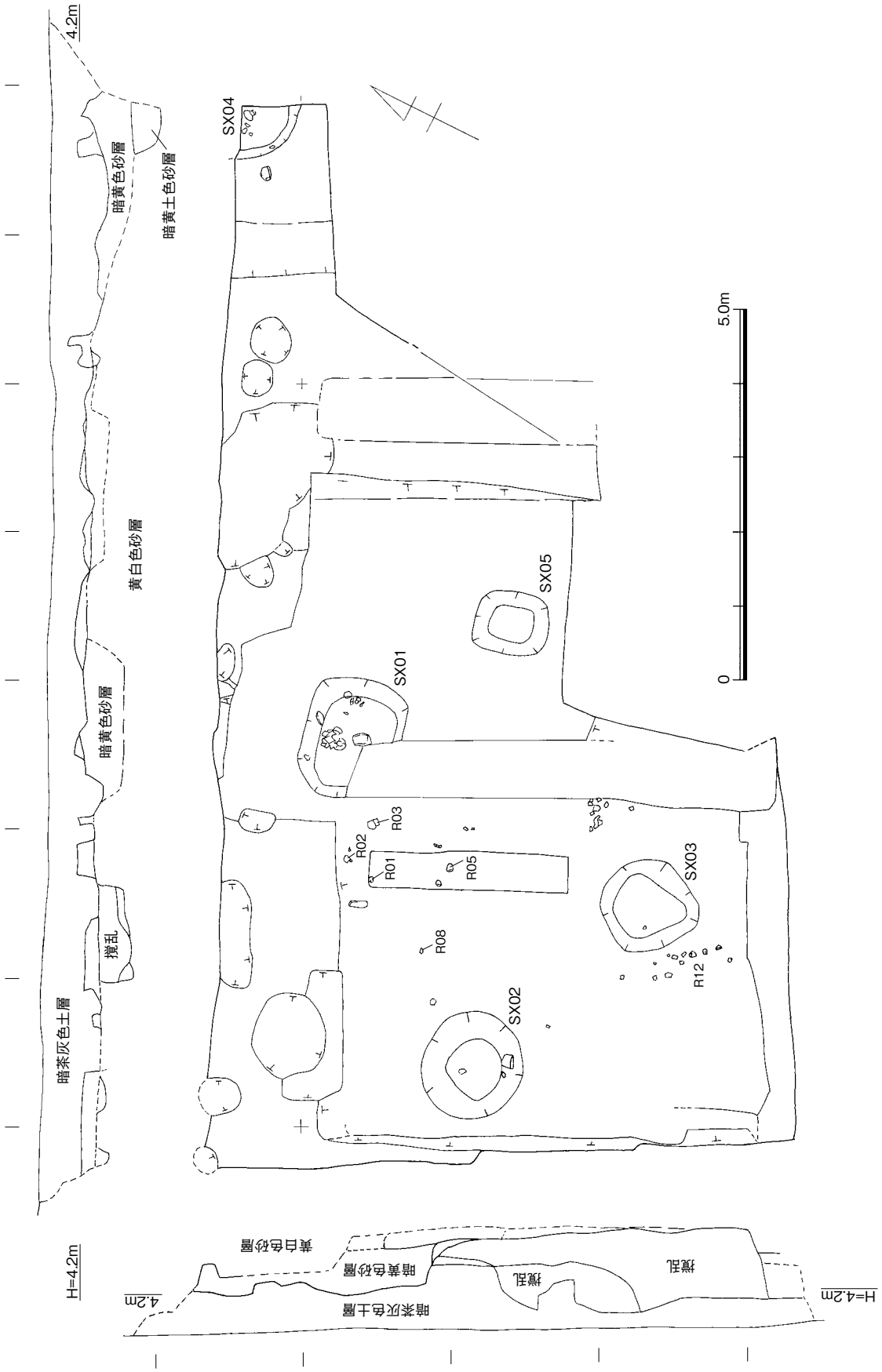
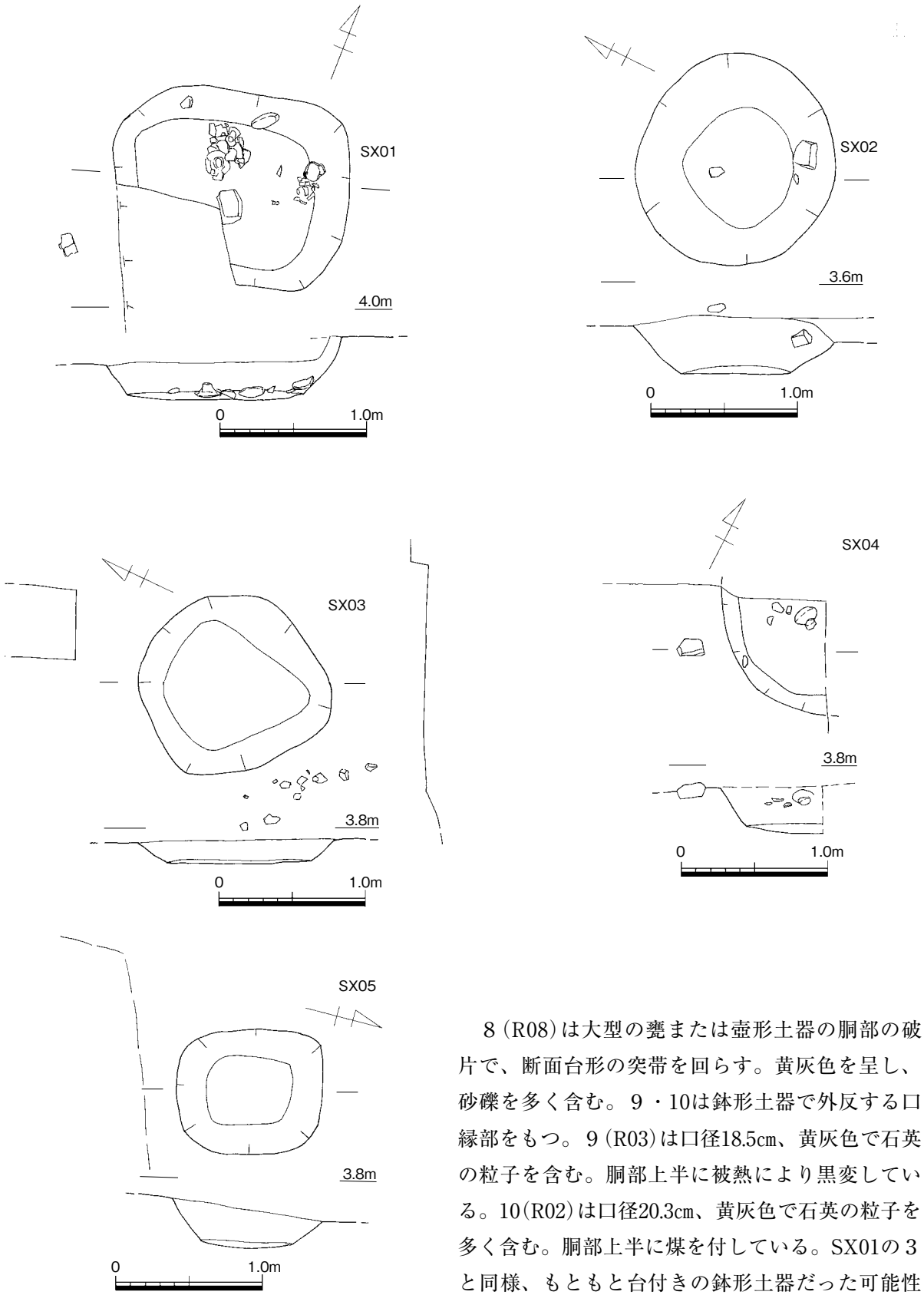


図６　西新町遺跡23次調査区遺構配置図（1/80）



8（R08）は大型の甕または壺形土器の胴部の破片で、断面台形の突帯を回らす。黄灰色を呈し、砂礫を多く含む。9・10は鉢形土器で外反する口縁部をもつ。9（R03）は口径18.5㎝、黄灰色で石英の粒子を含む。胴部上半に被熱により黒変している。10（R02）は口径20.3㎝、黄灰色で石英の粒子を多く含む。胴部上半に煤を付している。SX01の3と同様、もともと台付きの鉢形土器だった可能性がある。

図7　西新町遺跡23次調査区遺構実測図（1/40）

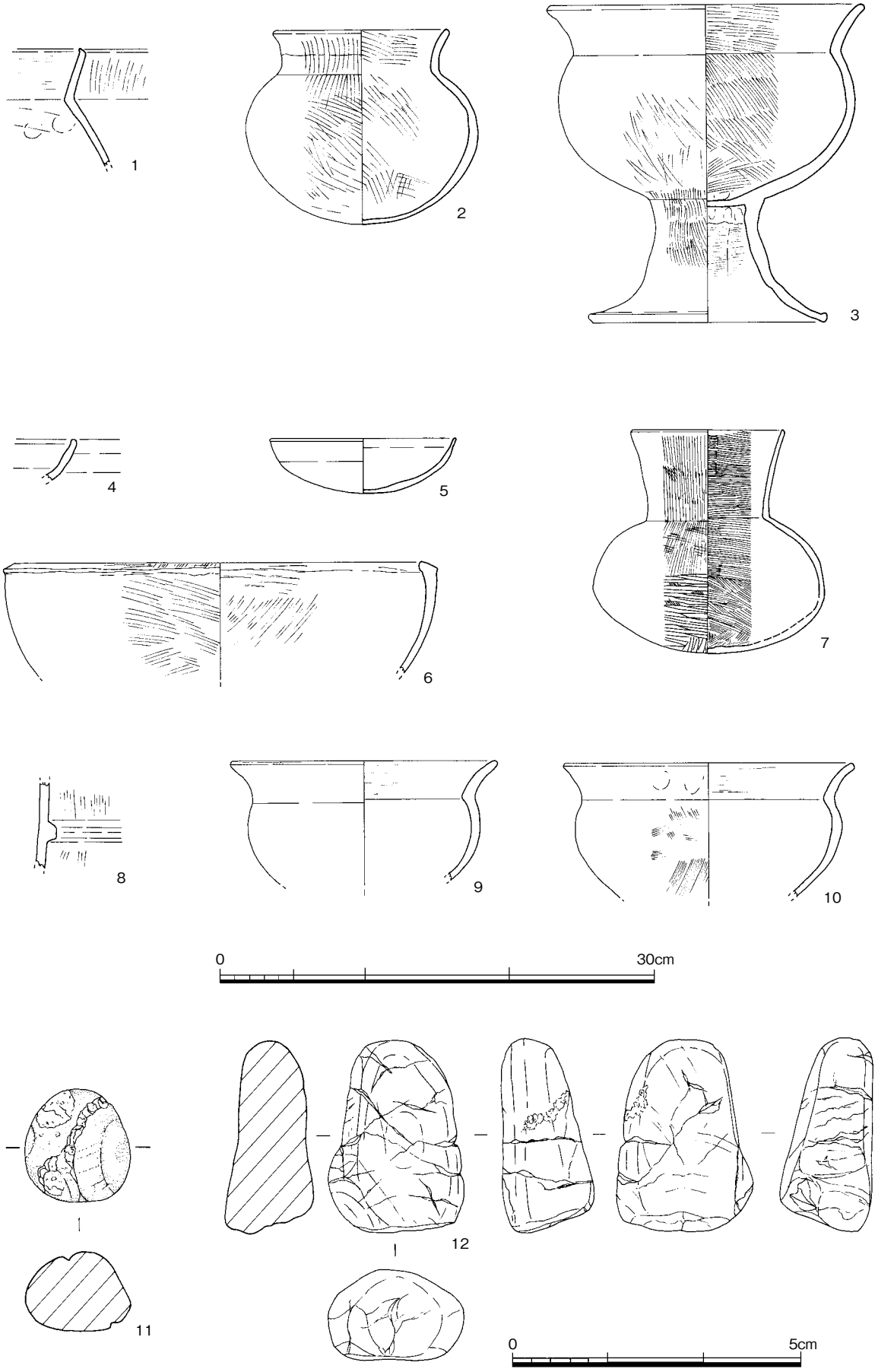


図８　西新町遺跡23次調査遺物実測図１（1/4・1/3）

11(R01)は節理のある礫で、断面の下面に敲打痕がみられる。節理の溝は石錘としては不向きである。12(R05)は下部の見通し付近に敲打痕がみられる。

検出面などの遺物（図９）

13は試掘調査時に検出された布留系甕で６割ほどを遺存する。体部はほぼ球形で胴部中ほどに重心をもつ。内面は底部から上方、胴部上部は矢印方向のケズリを加える。肩部に２条を単位とする沈線がめぐる。底部は丸底で内面に指おさえの痕跡がある。

14(R12)は布留系甕で３割ほどを遺存する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、内側に段をもつ。球形の体部中ほどに重心をもち、内面は底部から上方のケズリを加える。黄褐色を呈し、胴部下半に煤を付している。口縁部の屈曲面が狭く、端部内面に沈線がめぐる特徴から布留系甕でも初期の属性がみられる。

15は在来系の複合口縁壺の口縁部である。屈曲部は内傾して短く伸びることから丸底の底部を有する器種であろう。屈曲部にハケ目調整具の木口による刻目をめぐらす。黄灰白色を呈し石英の粒子を多く含んでいる。

16は硯の破片である。粘板岩製で残存長11.5㎝。裏面には文字が刻されているようである。17は元祐通宝、元祐は北宋七代哲宗の治世(1086年～1094年)の鋳造。表土採集。

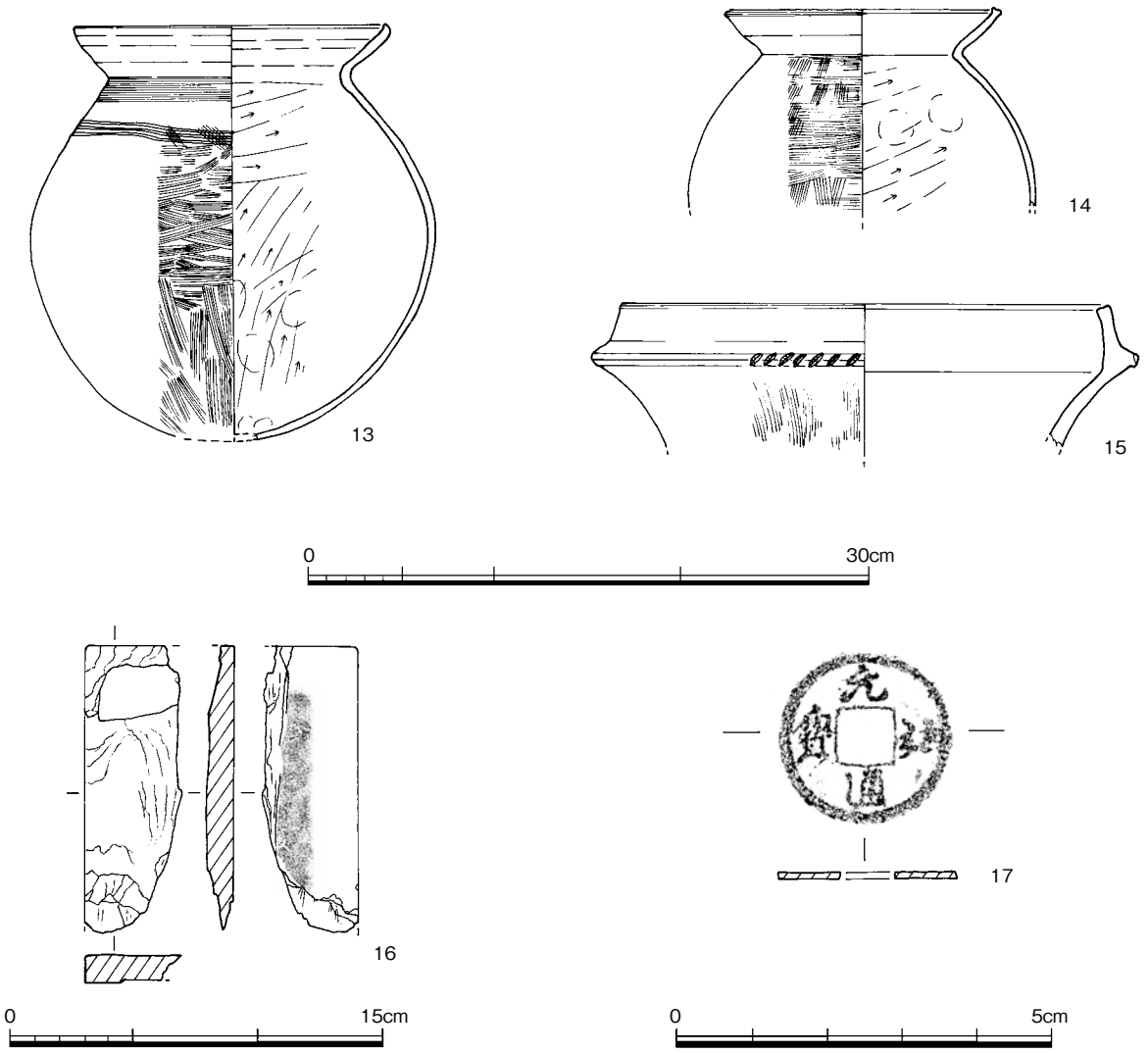


図９　西新町遺跡23次調査遺物実測図２（1/4・1/3・1/1）

Ⅳ．まとめ

西新式や西新町式とよばれる土器は、北部九州における弥生終末から古墳前期にかけての土器型式名で、西新町遺跡における弥生終末から古墳前期の変遷はおよそ４期の土器型式で捉えることができる。西新式土器は、尖底や丸底の長胴甕と複合口縁壷、朝顔状の受け部をもつ高杯などの在来系の器種で構成されtれいる。

西新式ＩＡ期は、在来系の複合口縁壷、長胴甕、高杯が主体をなす後期終末段階。西新式ＩＢ期は在来系土器に庄内系甕が共存する段階。西新式ⅡＡ期は布留系甕と外来系の高杯の出現が指標となる。西新式ⅡＢ期は布留系土器に畿内系の小型精製の鉢や壺、器台がともなう段階で、ⅡＢ期新段階には布留系甕形土器が主体を占め、口縁部が伸びて扁球の胴部をもつ小形丸底壷がともなう段階となる。

今回の調査は、これまで本調査を実施した中では最も東側に位置している。検出された遺構は土坑を主体としている。出土遺物からおよそ３世紀代の集落の広がりを示すものである。

土坑SX01は今回検出された遺構の底近くで土器がまとまって出土した。土器は在来の器種によって構成されており西新式ＩＡ期にあたる。13の布留系甕はⅡＢ期、14はⅡＡ期で口縁端部内面の稜線など初期の特徴がみられる（西1986）。SX04の壺７はⅡＢ期新段階に相当する。

限られた面積ではあったが、弥生終末から古墳時代にかけての湾岸部の様相についての所見が得られた。東端で検出されたSX04は基盤となる黄色砂層面が東方に向かって低くなることを予見させる。遺構の東側への広がりについては今後も試掘調査などの内容を注視する必要がある。

【参考文献】
西　弘海 1986「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社
常松幹雄 2003「弥生終末期の土器と土師器」『季刊考古学』第84号、雄山閣

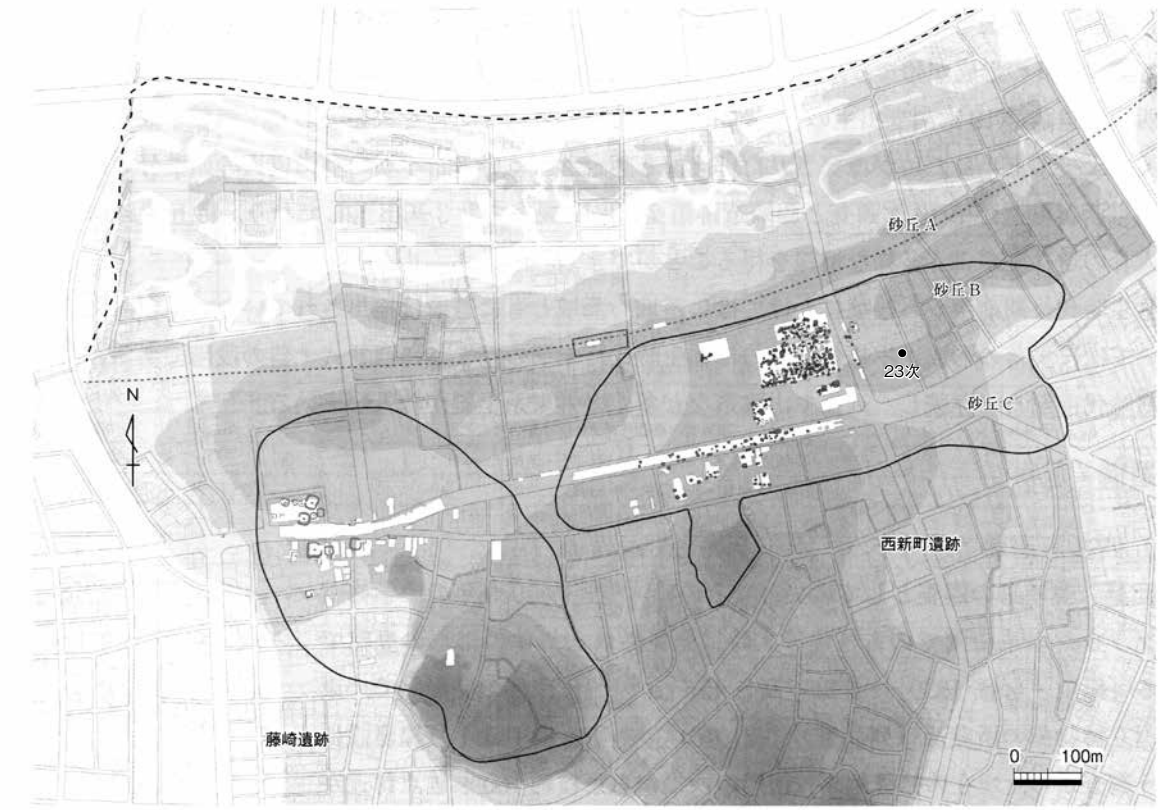


図10　西新町遺跡と藤崎遺跡の立地（出典：常松2016）

1　第 23 次調査区（東から）

2　第 23 次西調査区（南から）

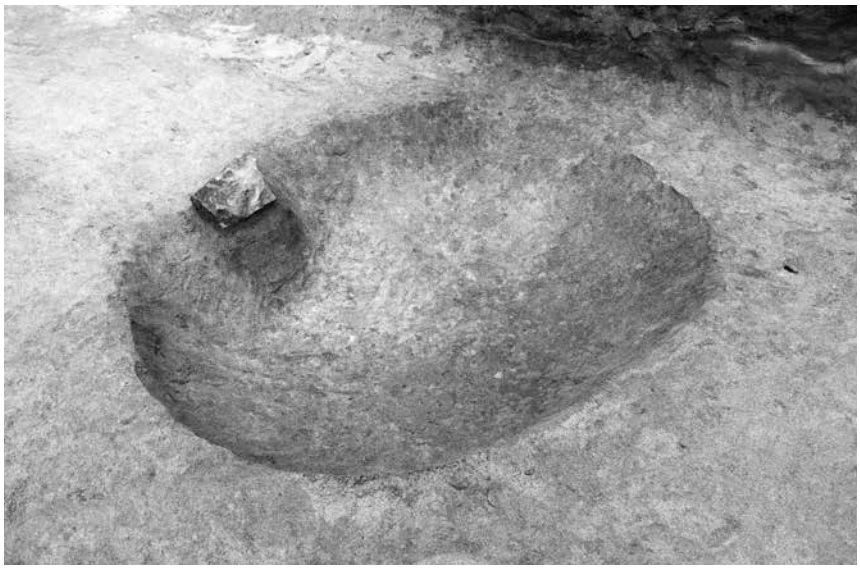
3　第 23 次西調査区遺物の分布（南東から）

4　第 23 次調査区近景（東から）

図版 2

5　第 23 次西調査区 SX03
（西から）

6　西調査区 SX02 発掘作業風景
（西から）



7　西調査区 SX02（北東から）

8　西調査区 SX01 発掘作業風景
（東から）

9　西調査区 SX01 1（南から）

10　西調査区 SX01 2（南から）

図版 4

11　第 23 次調査区（南から）

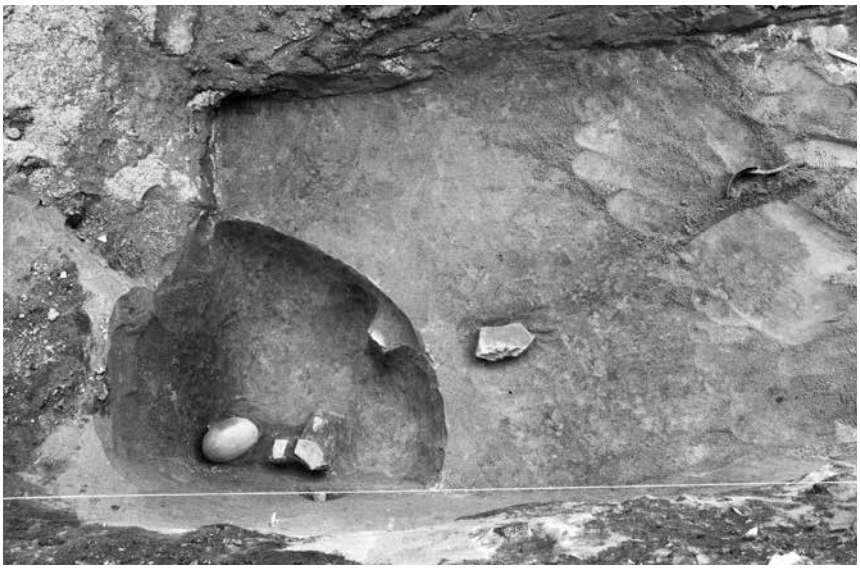
12　調査区北東部（西から）

13　調査区全景（西から）

14　調査区北東部（南から）

15　発掘作業風景（南西から）

16　第 23 次調査区（南から）



17　北東調査区 SX04（北から）

図版 6

3　SX01 出土台付鉢形土器

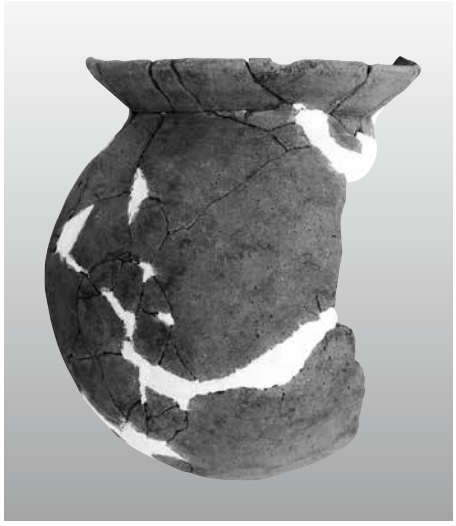
2　SX01 出土壺形土器

11　敲打痕のある礫

12　敲打痕のある礫

7　SX04 出土壺形土器

14　布留系甕（R12）



13　布留系甕（試掘トレンチ）

14　布留系甕（R12）内面

報　告　書　抄　録

ふりがな	にしじんまちいせき・じゅうに
書名	西新町遺跡 12
副書名	―第 23 次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1477 集
編著者名	常松幹雄（編）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１
発行年月日	2023 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
西新町遺跡（にしじんまちいせき） 第 23 次（だいにじゅうさんじ）	福岡県福岡市（ふくおかけんふくおかし） 早良区西新三丁目（さわらくにしじんさんちょうめ） 204 番 3	40137	0240	33° 35′ 2″	130° 21′ 29″	2020.12.14 ～ 2021.1.7	90	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西新町遺跡 第 23 次	集落	弥生～古墳時代	土坑	弥生土器・古式土師器・石錘	

要　約

西新町遺跡は、博多湾岸に形成された砂丘遺跡である。調査地は、砂丘の東部に位置している。

地表から0.8m下で黄白色の風成砂の層となる。風成砂を0.3mほど掘り下げた面で４基の土坑が検出され、うち２基の隅丸方形プランの土坑から土器がまとまって出土した。土坑は調査地の東側でも確認されたことから、集落はさらに東側に広がると推定される。

土坑からは３世紀頃の西新式段階の台付甕や壺などが出土した。風成砂の遺物包含層では漁労などに使われた石器も検出された。また表層では北宋の貨幣や近代のガラス瓶なども見つかった。

今回の調査区は、これまでの本調査で砂丘の最も東に位置している。検出された遺構の分布は、３世紀代の集落の広がりを示している。限られた面積ではあったが、弥生時代終末から古墳時代にかけての湾岸部の様相を示す所見を得ることができた。

西新町遺跡 12

―第 23 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1477 集

令和 5 年 3 月 23 日

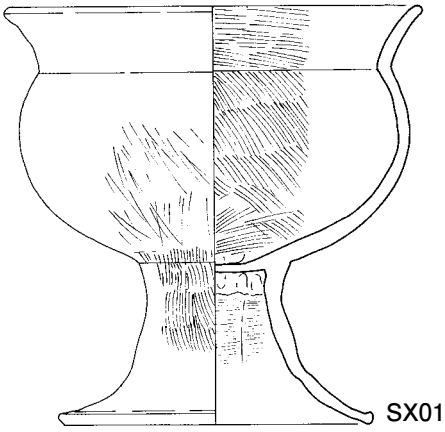
発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印　刷　有限会社 成光社

福岡市南区大楠 1 丁目 29 番 33 号

The General Report on the 23 Survey of Nishijin-machi Ruins



2023 Mar.

Board of Education of Fukuoka City